
野生生物保全思想と教育

岩田 好宏

JWCS 理事（会報掲載時）・元千葉県立千葉高等学校教諭

1. はじめに —授業内容から学習内容へ

鎌倉のある小学校に依頼されて JWCS のスタッフが授業をしたことがある。トラとその保護をテーマにしたもので、三つの節目を設けて進めた。初めは基礎固めで、トラという動物の野生の生活の暮らしを知ってもらうことを目標とした。子どもたちはトラのからだの大きさや、獲物を捕らえる確率が思ったほど高くないことなどに驚いていた。どの子も、トラに魅力を感じていた。表情と書いてもらった感想文でそのことがよくわかった。

二つ目では基本をおさえることにして、トラの密猟や商品化の様子を記録したビデオをみてもらった。トラの悲惨さと人間の行為の残酷さが、子どもたちの心をきびしくとらえた。最後は、ロシアでトラの保護に取り組んでいるボランティアの活動の様子を紹介した。子どもたちが、いろいろなかたちでトラの保護に積極的に取り組むことと、毛皮などトラを原材料とした商品を買わないことの大事さを理解したと思った。

この授業が教育的にみて意味あるものであったかは、さまざまな角度からの検討が必要である。授業後の子どもたちには満足した表情がみられたので、授業が失敗であったとは思えない。しかしその時だけの充実感が終わってしまうかもしれない。学んだことが必要な場面で確実によみがえるよう定着されねばならない。授業内容の学習内容への転換である。文章化やその他の方法で学んだことを表現することによって意識化することと、よみがえりのための引き金になる映像、言葉、行動・動作、道具など具体物が記憶されることに配慮した。

2. 野生生物保全教育とは

鎌倉での授業は、これで野生生物保全の教育が完結したわけではない。重要な基礎が築かれたとは思っているが、初歩の段階に留まったものである。重要な基礎ができたと判断したのは、子どもの日常生活、日常世界の中ではほとんど視野の中に入っていない「野生生物と保全」が、問題意識としてもたれたことを実感できたからである。

この授業から発展させ、野生生物保全教育をまとまりあるものにするための基本となる授業は、テーマを「野生」にすることであろう。子どもたちは、動物園のトラと野生のトラのちがいはわかったのではないか。トラの保護の大事さも感じ取ったにちがいない。しかし、家畜や飼育動物を大切にすることと野生の保全の区別は明確にはできていないはずである。野生のトラを保全することとは具体的にどういうことなのかもわかっていない。

「野生」の理解には、野生生物世界の認識と他者意識の形成の結合が欠かせない。野生生物の保全とは、今アフリカに住むゾウやインドに生息するトラがただ生きていられればよいというものではない。そうした動物たちが人間の手を借りることなくそれ自体の力で維持存続し、長い時間経過の中で自然史的に進化していくことが「野生」ではないか。生物とその世界の理を知り、

それにあって維持存続させることである。人間の意識を軸とする世界とは別の世界であることの認識が必要である。

他者認識の形成は、人間社会内部の場合は日常生活の中でも成立可能である。人々はいろいろな関係の中でつねに葛藤に出会いそれを学ぶ。そして人間の理の問題だからである。しかし、それでも意識的に人間の社会的諸関係の基本原則にすえることは難しい。「たがいに争うことなく、世界中のすべての人が幸せになる」の実現の困難さは、一つの要因はここにあるのではないか。

ところが、人間の理とは別の理で存在している自然、生きものの世界について他者意識を形成することはさらに困難である。もちろん自然やほかの生物が自分たちとちがうことはわかっている。が、かりに生物世界や自然を貫く法則がわかったとしても、それで他者意識が形成されたとは言いがたい。人間の意識をもとにした理と自然の理との関係、対比において一つの飛躍をともなって形成されるものである。それは、人類の長い歴史の中で実現できたことである。日常生活の中で自然発生的に成立することはほとんどできないのではないかと思う。そうだとすると、野生生物保全思想は、子どもが人類の歴史と対峙して身に付けるほかないのではないか。

人間が地球上に生物の一つの種として誕生し、その世界の一員としてなま入りしたときは、植物を採取し動物を捕らえ利用して暮らしていたにもかかわらず、そのことによって他の生物や生物世界全体の自立的存続を妨げることはなかった。人間も他の生物との「共生の時代」から始まった。しかし、それ以後農耕生活の時代に入って、人間はそうした野生の共生世界から離脱し、独自の人為的生物世界の中で暮らすようになった。人為的世界を広げる中で、野生の共生世界は人間にとっては破壊と収奪の対象となり、縮小・変貌していった。野生生物世界がはげしく破壊されていく様子を目の前にし、人間や生物が地球自然の諸々の相互関係の中で生存していることに気づき、野生生物世界の理が明確にできたとき、野生生物保全思想が生まれた。

3. 野生生物保全思想と教育

子どもたちが、人間がその歴史の中でつかんだ生き方と向かい合いながら現実の自分と自然的社会的諸問題に取り組み学びとり将来展望をもつ、これが教育の中での学びの基本である。

子どもたちは教育から離れても学ぶことができる。家族や友だち、見知らぬ他人との関係の中で、道具や地域の環境とのかかわりの中でさまざまなことを学ぶ。その中で発生した問題が生活の中で解決する方法が見つからないときには、通常的生活から離れて大人に聞き、場合によっては本を読むなど学びに専念することもある。これは「自立的学び」といわれるものである。

これに対して、教育の中での学びは学ぶ者と学ばせる者（教える者）の意図的な関係の中で成立するものである。（「関係的学び」といわれている）。教育的学びは、また日常生活の中で自然発生的に成立する、あるいは自立的に成立する学びとはちがう。そうした場面では学びにくい、あるいは学べないことを学ぶところに意味がある。教育的学びのもっとも重要なことは、人間の歴史の中でみつけた生き方を学ぶことである。もちろん過去から現在までの人間生活とこれからの未来の生活とはちがう。これまでの歴史の中で身に付けたものがそのまま将来に役立つわけではない。教育とは単なる文化遺産の継承ではない。野生生物保全思想は、人間の長い歴史の中で形成されたものであり、教育の中でしか子どもたちは学ぶことはできないのではないか。

一方で、野生生物保全教育は教育全体に対してあらたな価値を提示している。野生生物保全が人間存続にとって不可欠であるという社会的課題を教育として受けとめることがその一つである。第1は、子どもの人格形成の上で重要な他者認識の育成である。これは多面的である。一つは、人間は生きもの世界の一員であることを認識し、自身だけでなく他者（生きもの）の存続に教育的な目を向けることである。それはまた、人類滅亡後の生物世界にまで責任をもつという教育的課題を含んでいる。第2は人間社会における個と個の関係における他者認識とのつながりである。

生物世界では、すべて自体の生存、繁殖、種の持続を軸にまわりの世界をみている。が、人間はそれに加えて、他者を他者の立場に立ってとらえるという独自の視点をもつことになった。そのことを人間的特性の大事な一つとしてとらえる教育的課題とも関係している。

(JWCS 会報 No. 45 2006 年 4 月より転載)